



ダックスフントのワープ



藤原伊織

集英社

初出誌「すばる」

「ダックスフントのワープ」

一九八五年十二月号

第九回すばる文学賞受賞作

「ネズミ焼きの贈りもの」

一九八六年八月号

ダックスフントのワープ

一九八七年二月二五日 第一刷発行

著者 藤原伊織 ふじわら いおり

発行者 堀内末男

発行所 集英社 しゅへい

東京都千代田区一ツ橋二一五—一〇
郵便番号 一〇一

出版部 (〇三) 二三八一—二八四二
電話 販売部 (〇三) 二三〇一—六—七一
製作課 (〇三) 二三八一—二九六四

印刷所 大日本印刷株式会社

定価 九八〇円

検印廃止

乱丁・落丁本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替え致します。本書の内容の一部または全部を無断で複写、複製、転載することを禁じます。

目次

ダックスフントのワープ

7

ネズミ焼きの贈りもの

139

装丁者
林
恭三

ダックスフントのワープ

ダックスフントのワープ

1

「そのダックスフントは、スケートボードに乗ってたんだよ。ダックスフントのスタイルは、知ってるね。とても足が短い。だからスケートボードは理想的な乗り物だった。彼は発見したんだ。体型にとってもあつてる。スケートボードに乗ったダックスフント。頭の中で、絵になった？」

「なった」

「オーケイ。で、そのダックスフントは、走りだしてすぐに興奮し始めた。なにしろ初め

ての経験だったからね。まわりの景色が、素晴らしいスピードで流れていくんだもの。今までそんなスピードで走ったことがないから、ダックスフントはとても嬉しかった。得意でも、あった。仲間に教えてあげる時のことを想像してね。そうだな、君がもつとちっちゃいころ、ジェットコースターに初めて乗った時の気分、そいつを思い浮べてごらん。そういう気分になったのさ」

「私って、究極において冷静な子だったの」

マリは、鼻の頭に一粒、汗をのせていった。

彼女の机の端には、いつもどおり広辞苑が置かれていた。それを一日に最低五ページ読むのが、彼女の唯一の趣味である。十歳の女のこにしては別に咎める必要もなければ、頷めることもない。スヌービーのぬいぐるみが広辞苑にかわった。それだけの話だ。究極において、彼女の趣味の問題だ。

「でも、ジェットコースターに初めて乗った時は」彼女は、いった。「高揚したな。新幹線の運転手さんみたいだった。一番前の席だったの」

「なるほどね。でもそのダックスフントは新幹線を運転するより、ずっと楽しかったと思うな。なにしろ決まった時間に、決まった駅で停まらなくてもいいからね」

「そうなの」彼女は、そっけなくいった。「名前は？」

「誰の？」

「そのダックスフント。名前がなくっちゃ」

「ないさ。ただのダックスフント」

マリは疑わしそうな眼で、僕をみた。

「いくつなの？ 年齢」

僕は、犬の平均寿命を知らなかった。

「九十歳。とにかく恐しくお爺さんだったんだ。だから世の中の話は、ほとんどなにもかも知ってた。たとえば野球のブロックサインの見抜き方とか、しゃっくりの止め方とかさ。でも、スケートボードに乗ったのは初めてだったんだな」

「お爺さんでも、スケートボードに乗るの？」

「乗るさ。お爺さんだって、いろんなお爺さんがいるからね」

「季節は？」

僕は少しの間、考えこんだ。

「秋、だね」

「秋？」

「そう。銀杏の落葉が路に積もっていてさ。スケートボードが風みたいに走ってくから、

ソリの走った後の雪煙みたいに、落葉が舞うんだ。カサコソ、音を立ててね」

「ふうん。素敵ね」

「素敵なんだ。でもそのうち、彼は大変なことに気がついたのさ」

「どんなこと？」

「そのダックスフントは、ブレーキのかけ方を知らなかったんだよ。なにしろスピードがつき過ぎてたし、ダックスフントの短い足じゃスピードを落すくらいの支えには、もうならなかった。お爺さんだしさ。おまけに下り坂にさしかかって、どんどんスピードがあがっていくんだよね」

「大変だ」

「大変なんだ。初めは嬉しくて凄く興奮してたけど、段々不安がそれにとって変わっていった。嬉しくて歯止めが利かなくなっちゃって、不安になっちゃまう。そういうことってよくあるだろ。君はどう？」

マリは爪を噛んで、ちょっと考えこんだ。

僕はぬるくなった紅茶を啜り、キーウイのタルトを摘んで、一口齧った。

「あるわ。初めて海へ行った時がそうだったの、パパ達と一緒に。泳ぎはプールで覚えたけど、海でもすぐ泳げるようになったの。大きな波にもすぐ慣れたのよ。私って、とても

「順応的な才能があるの」

「そうだね。君のとても素敵なところだ。才能が、どっさりある。順応性もそのひとつかもしれないね」

「順応性じゃないの。順応的な才能」

「そうだ。悪かった。続けて」

「それでね、どんどん沖へ出ていったの。浮き袋つけてだけど。だって沖の方がキラキラして、凄く美的だったんだもの。美的なものって私、好きなの。でも気がつくとも、浜辺がとても遠くなってきた。パパもどこに居るかわかんなかった。浜辺の人の顔が不分明で、それでもうきつと浜辺に戻れないんじゃないかって思ったの」

「パパはどうしてたんだい」

「わかんない。でも、きつと新しいママと愛しあってたと思う」

「どうして、そう思うんだい」

「そう思うんだもの。こういういい方って、きつと理性的じゃないわね。でも感覚的ないい方も私、時々するの。変化があっていいでしょ。話し相手も退屈しないし」

「そうかもしれない。で、君はどうした？」

「泣きだした。私って究極において勇気のある方だけど、もしかして鯨か何かが襲ってきた」

「たら敵わないでしょう？　自我の限界を感じたの」

「そのまま海にいたら、人魚姫になれたかもしれないよ」

「私って、リアリストなのよ」

マリは、口を尖らせた。

「どうやって、浜辺に戻ったんだい」

「男の人が、ちょうど先生ぐらいの人が、泣いてる私を見つけて浜辺に連れてってくれたの。こういうの、移送したっていうの？」

「連れていく、だけで充分だと思うよ。パパには叱られた？」

「叱られなかった。でも、どうでもいいの。ダックスフントの続きを話して」

「そうだった。長い坂道でどんどんスピードがついてくんだったよね。ダックスフントは弱り果ててたんだ。なにしろ、コントロールがきかない。それこそ新幹線の屋根に乗っかってるようなものさ、運転席じゃなくてね。ダックスフントの最初の興奮はどこかへ消しとんで、もう不安でいっぱいだったんだ。で、その不安が、今度は恐怖に変わっていったんだな」

「……………」

「なぜってね。坂道の下に、ちっちゃな女のこがいたんだよ。ちょうど君の半分くらい、

五歳くらいの女のこと。スケートボードはまっすぐ、その女のこの方に向かつてくんだ。でも、ダックスフントは方向を変える方法を知らなかったのさ。スケートボードは、もう時速百キロを越えてるっていうのにな」

「女のことは、逃げなかったの？」

「逃げなかった」

「どうして？」

「そのことはダックスフントが好きだったし、信頼もしてたんだ」

「そういうのって、あまり理性的じゃないんじゃないかしら」

「君は五つの女のこに理性を求めるのかい？」

マリは、鼻を鳴らした。

「まあ、たしかに理性的じゃないかもしれないな。でも結局、そういうタイプの女のこだったんだ。そういうしかないね。でね、ダックスフントはその女のこの信頼がとてよく理解できた。その時ダックスフントは九十年の生涯で、最高の恐怖を感じたんだよ。どうしようもないんだ。こういう時って、人間ならどういう気持ちになると思う？」

「パニック、かな」

「君の才能のひとつは、とても言葉をたくさん知ってることだね。十歳の女のこにしちゃ

素晴しくたくさん言葉を知ってる。そう、最初はパニックさ。でも段々近づいてきて、時速百キロで、後五メートルって時にやもうパニックの段階は通り越してるんだ。一秒もたないうちにダックスフントも女のこも、衝突して死んじやうかもしれない。破局さ。こういう時人間なら、心理学者の言葉でゲシュタルト崩壊ってのを起こすんだよ」

知らない言葉がでてきたので、マリは不機嫌に眉を寄せた。僕が黙っているとやがて、プライドが好奇心に負けた。

「なに、それ」

「つまり、すべてを諦めるのさ。判断のすべてを放棄する。わかりやすくいえば、この世の中のなにかもがどうなってもいいって気持ちになっちゃうんだな」

「わかりやすくいってもらわなくもいいの。それで、ダックスフントもそうなの？」

「そのダックスフントは、とても意志が強かった。後五メートルって時に、女のこの顔を見たんだよ。するとその女のこは、まだ笑顔を浮べてるのさ。百年は心に残りそうな、素敵な笑顔だった。ダックスフントはその瞬間、恐怖以上に一種の強烈な歓喜、歓喜ってわかるね、を感じたんだ。いいかい。世界はだいたい千個くらいの真理から成り立っている。ジグソーパズルみたいなもんさ。で、笑顔と信頼は、隣りどうしの断片かけらなんだ。このふたつが背中を寄せあわなきや、世界全部が壊れてしまう。ダックスフントはその仕組をとて